報告

地域産業研究会

第 10 回食の討論会　「地域資源について考える」
黒松内町の多様な資源

須　川　清　一

はじめに

当研究会では、外部講師を招いて食に関する討論会を定期的に行ってきたが、当研究会にはいろいろな分野の専門家もおり、昨年から食の討論会の一部を内部講師により実施している。

今回は、黒松内一泊見学会を計画していることから農業や環境の専門家である当研究会の伊藤恒雄代表を講師に、第 10 回食の討論会を 2010 年(平成 22 年) 9 月 17 日(金)に実施した。

地域資源は、広義には人間の活動にとって有用な「有形、無形」の要素を指し、すべてのものが資源となり得るが、その価値は場所や社会システム等によって異なる特色がある。黒松内町を例に、地域の活性化に役立つ地域資源について考えたいとの切り口で講演をお願いした。講演の内容について、その要点をまとめた。

1. 地域資源を活用した地域活性化

農村にはさまざまな地域資源があり、特にバイオマスの利活用による地域活性化について、最近の資料を基に事例や最新の話題を紹介された。農村の地域資源は、広く薄く存在するため、製品の質や量などの問題があるものの、新たな技術と工夫、地域システムの構築によって地域活性化の資源になる。

江戸時代には、水力による水車利用や食物残渣利用の堆きゅう肥などのシステムがあったが、その後の経済効率化優先の大量生産等への移行によって、地域資源の活用の視点が失われ、公害の発生などの環境問題を引き起こす結果となった。今一度、地域内の廃棄物等をバイオマス資源の視点から捉え、これらの地域資源を活用した地域システムの構築を考えてみる必要があるのではないだろうか。

2. 地域資源とは

地域資源の分類は、「いちから見直そう！地域資源　三井情報開発㈱総合研究所　ぎょうせい 2003 .7 .31」(以下「見直そう地域資源」)をもとに分類した。

(1)固定資源

①地域条件
- 気象的条件――降雨、光、温度、風、潮流等
- 地理的条件――地質、地勢、位置、陸水、海水等
- 人間的条件――人口の分布と構成等

②自然資源
- 原生的自然資源――原生林、自然草地、自然護岸
- 二次的自然資源――人工林、里山、農地等
- 野生資源――希少種、身近な生物等
- 鉱物資源――化石燃料、鉱物素材等
- エネルギー資源――太陽光、風力等
- 水資源――地下水、表流水、湖沼、海岸等
- 環境総体――風景、環境の同化能力等

③人文資源
- 歴史的資源――遺跡、歴史的文化財、歴史的建造物、歴史的事件、郷土出身者等
- 社会経済的資源――伝統文化、芸能、民話、祭り
- 人工施設資源――構築物、構造物、家屋、市街地街路、公園等
- 人的資源――労働力、技能、技術、知的資源等
- 情報資源――知恵、ノウハウ、電子情報等

(2)流動資源

①特産的資源――農・林・水産物、同加工品、工業部品・組立製品等

②中間生産物――間伐材、家畜糞尿、下草や落葉、産業廃棄物、一般廃棄物等

(3) 黒松内町の地域資源

地域資源の把握にあたっては、市町村別統計から後志管内の土地面積、人口、企業などの基本情報や農林水産業の情報を他の市町村と比較した結果、黒松内町の資源の特徴を整理すると次のようである。

町の特色は、農業分野のうち畜産の占める割合が高い。これは、春から夏にかけて発生する霧の影響で耕種部門の栽培が難しいためである。なお、畜産振興の一例として「放牧畜産基準認証制度」が平成 21 年 4 月より始まったが、放牧牛乳などの取り組み等の可能性がある。

黒松内町では、町総合計画のなかでブナの里づくりの名のもと「黒松内型都市と農村の交流」を位置づけ、ブナ北限の里らしい 4 つのテーマを掲げている。

①自然体験、農業・農村体験の提供
②美しいアメニテイーの創出
③新鮮で安全なグルメの提供
④学習、文化イベント、スポーツの充実

潜在的地域資源であるブナ林などの自然、農村特有の牧歌的風景と築いてきた資源であるアウトドア施設、滞在型交流拠点施設、情報拠点・環境学習、食の付加価値化施設、憩い・交流施設、温泉施設、道の駅施設などのハード、川釣り等の安らぎの空間、食の提供、小物屋・民宿・就農、フットパス・ブナウオッチなどのイベント、ブナの自然学校、景観修景などのソフトを活用した取り組みが進められている。

フットパスの取り組みは、19 世紀のイギリスが発祥の地であるが、黒松内の豊かな自然や文化に触れる取り組みとして、多くの方がこの地を訪れている。黒松内町の交流人口は、平成 21 年度は約 15 万人で、歌才ブナ林 8 万人、道の駅 5 万人、その他 2 万人となっている。

3. 地域資源と歴史

(1) 社会経済の変化

江戸時代は、植物資源の循環利用や水車の動力利用など循環利用が行われていたが、明治維新以降の産業革命と重化学工業化・エネルギー革命によって石炭から石油、大量生産・大量消費への変化、その結果、地域内循環は崩壊し、石油を始めとして海外資源に依存する状況となった。

近年、資源に関する考え方は、ハード資源から人的資源や情報資源などの重要性がさけばれている。

(2) 社会経済の変化が地域経済に与えた影響

生産に要する資源は、効率の名のもとに外国(地域外)に依存することとなった。製品の生産は、均一・安定・大量などが重視され、大量生産、大量消費型システムとなり、資源の調達も均一で安定した資源への依存傾向を強めた。

大量生産指向は、結果として採用される資源と放棄される資源の両極化が進行し、都市への人口流出、地方の地域資源の担い手不足等から地域資源の放棄や消失が進むこととなった。

4. 地域資源を見直す動き

地域資源についての過去 40 年間の動きは、古くから大量生産による公害等の弊害、オイルショック等から小規模分散型の必要性もさけばれたが、限定的な取り組みが続いてきた。

1970 年代には、エイモリー・ロビンスによる「ソフトエネルギー・パス」、E.F. シューマッハによる「スモール　イズ　ビューティフル」など小規模分散型の技術や地域復権が叫ばれている。

1980 年代には、テーマパークが活況を呈し、地域に無いものを持ち込む取り組みや、地方を生かそうという「全道一村一品」等が取組まれた。

1990 年以降は、環境問題のクローズアップから地球規模の動きが活発化し、環境問題の解決に向けて小規模分散型地域資源の見直しの動きが高まった。

小規模分散型地域資源の見直しへの動きが高まった理由は、次のようなものである。

・他地域からの資源移入、大量生産・大量消費・大量廃棄の反省
・廃棄物・排熱などの「負のストック」の処理や活用を求められた
・環境保全機能の低下に対する危惧、社会環境の変化により廃棄されている資源(耕作放棄地等)の公益面を農林側が打ち出した(北海道の農業・農村

の多面的機能の評価額は 1 兆 2 千億円で、国土保全、アメニテイー、教育・文化などの機能である)。また、

・担い手のパワーシフト(財力から知力や情報力へ)の潮流による地域資源の見直し
・地球環境の高まりの中で、NPO、NGO 等が注目され、これらの市民団体への行政や企業からの期待
・高齢化社会の進行の中で高齢者の社会参加、男女共同参画などのシステム作りが進行
・高齢者や女性、地域住民の人的資源の活用が進む
・地域資源の活用方法として市民協働の動き、地域通貨の取り組み(栗山町:クリン、長野県上田市:蚕都クラブ　ま〜ゆ)

5. 新たな価値で見直す地域資源

(1)地域資源の特性とタイプ

地域資源の一般的価値は下表のようである。

表－地域資源の市場価値の高・低

価値観点	高い	低い
量	大きい	小さい
質	優れる	劣る
数	希少	ありきたり
配置	まとまっている	ばらついている
アクセス	利用しやすい	利用しにくい
効用	効用がある	迷惑である
活用	活用されている	放棄されている

出典:「見直そう地域資源」

(2)地域資源活用の必要性

地域資源の価値基準は、変化しており、見方で大きく異なる。

①市場価値の低いものであっても、その地域に存在することに意義があるものがある。(伝統、文化など)

②未利用資源には外部効果がある。(里山、棚田)

③地方には、これまで大都市追従型の地域づくりではなく、これまで活用してこなかった地域資源の活用への期待がある。

④環境問題への対応として、地球温暖化対策、廃棄物の利用(バイオマスなど)が求められている。

6. 未利用の地域資源活用の可能性

未利用資源は、表のようにこれまであまり活用されていないが、価値観の変化などから今後の活用の可能性が高い。

表－未利用な資源の3タイプ

タイプ	特　徴	例
「凡」の地域資源	普通、平凡、特徴がない、どこにでもある、差別化が困難である	・身近な生物 ・なにげない風景 ・自然エネルギー (小水力、太陽光等)
「負」の地域資源	利用しにくい、存在が迷惑、イメージが悪い(とみなされがち)等	・負の地域条件 ・迷惑施設、不法投棄、不良資産 ・汚染された土壌、水域等
「廃」の地域資源	かつて活用されていたが、廃れた、見捨てられた、消出した、廃棄されている	・二次的自然(里山、棚田等) ・伝統工芸、伝承の知恵 ・廃校、空家、空店舗 ・廃棄物等

出典:「見直そう地域資源」

未利用の地域資源活用の可能性は、次の 4 つの理由から高いと整理される。

①物の豊かさから精神的な豊かさへ意識が変化している。(価値の変化による市場のニーズの発生)

② NPO 等の市民活動の活発化(高齢化の進展、高齢者も地域の担い手)

③技術革新(特に廃バイオマスの再資源化、ホタテ貝で紙作り)

④環境配慮を市場に内部化する方向で社会システムが進行(京都議定書・CO2 売買、環境税、産業廃棄物税)

後志地域の寿都町は、風が強い気候であるが、これを利用して風力発電を行っている。施設は、町の所有で、風車 9 基で発電し、年間約 3 億円の収入がある。

いろいろな地域資源を活用した事業には、多額の資金の投入が必要であるが、小水力発電の取り組みのために市民ファンド事業(おひさまエネルギー

ファンド：環境エネルギー政策研究所）で、立山アルプス小水力発電事業（最大募集額 7 .8 億円）を計画中である。地域資源を活用するためには、利用者ニーズを踏まえ技術や資金などいろいろな工夫が必要である。

本講演会の目的の一つは、地域の活性化に役立つ地域資源であったが、伊藤講師から、「スモールビジネスに見る多様な田舎の資源、田中淳夫（森林ジャーナリスト）農業と経済　2008・11」から地域資源を活用したいろいろなビジネスの紹介があった。

①蝶ガイド：石垣島での蝶マニアへのサービス
②猫の爪とぎ器製造：猫の爪とぎ用道具
③木工素材：間伐材を利用した家具づくり
④登山客の車：運転代行業
⑤便利屋：電灯の付けかえ、家具の移動
⑥在庫スペース：古本通販のための在庫、発送
⑦進学塾：農村の進学塾
⑧田舎ツアー：都会の人が田舎で楽しむ

スモールビジネスの特徴として次のことが挙げられる。

・Ｉターン：都会の人が多様なアイディア
・多品種少量生産：資源が多様で少量ニーズ
・田舎の家計：小ビジネスの集合体
・田舎の魅力：ビジネスのヒントは都会に

7. おわりに

伊藤講師は、黒松内町との交流を進めている地域産業研究会、技術士の立場で、次のようにまとめられた。地域資源を見つけ出し活用する取り組みは、基本的に地域の人々が行うことであるが、技術士は外部の者、専門家の立場で地域資源の魅力や活用の可能性を判断することができる。「地域と研究会のさまざまな交流は、このような視点で意味がある。」と結ばれた。

「食の討論会」は、その名のように講演と討論会を通して議論を深め、理解を深めることを目指している。本講演を終えて参加者からいろいろな意見が出された。その一部を紹介する。

①現在の経済性の視点だけで価値を評価することは問題があるのではないか。ビジネスでも人と人とのつながりに価値があるのではないか。今の高齢者は、人と話をしたいとの思いをもっており、電気製品の販売の例では、個別の訪問サービスの充実によって低価格ではなくても成立している電気店のケースがある。
②長野県上田市の「地域通貨ま～ゆ」についてのどのような活動なのかとの質問があった。地域通貨は、利用者が相互にあいさつ、手伝うことから人と人のつながりが生まれることに価値があり、地域の人にとってはお金に換えがたいものである。
③人的資源として、地域がよくみえる、チャレンジするよそ者、バカ者の活用が大切ではないか。
④地域資源や活用には、システムづくりがポイントではないだろうか、収入が担保されないと運営を持続できない。
⑤地域資源のひとつであるゴミ資源の活用に向けても、数町村で共同して運営している現在のシステム維持が前面に出、一部の町村が独自にバイオマス化を推進することが難しい状況となっている。
⑥そのほかにもいろいろな意見がありました。

地域産業研究会では、10 月 1 ～ 2 日に向けて「黒松内一泊見学会」を予定している。過去約 20 年の間に黒松内に移住し、小ビジネスを展開している方を訪ねるとともに、町職員とのワークショップを通して黒松内の魅力を考えるものである。今回の講演会の内容が活動に活かされることを期待している。

須　川　清　一（すがわ　せいいち）
技術士（農業／総合技術監理部門）

（社）日本技術士会北海道支部
地域産業研究会幹事長
エスエスコンサルタント事務所
一般社団法人技術士リングネット